

積雪寒冷地の住宅の収納および老人同居のあり方に関する計画的研究

足達富士夫

目次
序
I 収 納
1. はじめに
1-1 収納について
1-2 研究のフレーム
1-3 研究方法
2. 持物と収納の実態
2-1 持物の所有実態
2-2 収納スペースの実態
2-3 置き場所と評価
3. 収納家具
4. 評価と問題点
4-1 収納空間の現状に対する評価
4-2 収納に関する居住者の意識
5. 収納システム
5-1 ものと収納スペースとの対応
5-2 収納スペースの種類、位置、規模
5-3 ケース・スタディ
II 老人同居のあり方
1. 目的と方法
2. 同居の理由、家族構成、職業
3. 健康状態
4. 老人室（専用・共用）の広さ、位置、様式
5. 老人室の暖房と寝具暖房
6. 老人室の設備と機能
7. 計画上の諸問題

序

積雪寒冷という環境条件は住宅の材料、構法、設備はもとより、空間構成の上でも温暖地のそれとは異なる独自の扱いを必要とするが、この研究は、その中で、収納および老人同居の問題をとりあげて、寒地住宅の一側面について検討を加えたものである。

収納と老人同居の問題は、テーマとしては必ずしも関連の深いものではない。にもかかわらず研究テーマとして両者をならべたのは、理論的理由よりもむしろ体験的動機からである。両者とも、積雪寒冷という環境条件の中で、たとえば老人同居は「はなれ」よりも同じ棟、収

納スペースは屋内化が必要であり、また屋内で生活あるいは収納が完結するような、十分の規模を必要とする空間であって、住戸全体の空間構成の上でも独自の配慮を要求する重要な要因である。にもかかわらず、両者とも従来、居住者自身が日常意識することが少なく、計画の際にも一つの盲点のように扱われてきた部分なのである。

両方とも、住宅の中の一つの部分であって、この研究では部分としての現状の把握、問題点の指摘および若干の提言を行っている。これを住宅計画全体の中に位置づけるのは、今後の問題である。なお、研究組織およびメンバーは次のとおりである。

日本建築学会北海道支部寒地住宅研究委員会

収納・老人部会

主 査	足 達 富士夫	(北海道大学工学部)
	洪 悦 郎	(同 上)
	伊 藤 弘 子(故)	(藤女子短期大学家政科)
	山 崎 治 子	(同 上)
	菊 地 弘 明	(北海道工業大学)
研究協力	三 浦 房 江	(藤女子短期大学家政科)
	天 野 ち よ	(同 上)
	古 瀬 絢 子	(同 上)
	野 口 孝 博	(北海道大学工学部)
	鎌 田 清 子	(同 上)

I 収 納

1. はじめに

1-1 収納について

収納スペースの確保は、広い居間の確保とともに、積雪寒冷地における住戸計画の中心的な課題である。元来、住宅自体が、生活を「収納」する施設にほかならない。人間を収納するスペースが居室なかんづく居間であり、物を収納するスペースがいわゆる収納スペースになるわけである。多雪地では、気候風土条件がつくり出す生活様式とそれに見合う空間構成からして収納の問題はとくに重要である。

第1に、多雪地では、冬期間、生活全体を屋内に収容

しなければならない。まずこの点が四季を通じて庭を日常生活空間として利用できる温暖地と大きくことなる。庭は、人間にとって居間の延長であると同時に、物にとっては、一年中、自転車、空箱、ガラクタの類をおいておく収納空間でもある。温暖地における庭の収納空間としての役割は、意外に大きい。そういう収納スペースを多雪地ではすべて屋内化しなければならない。

第2に、冬期間、屋内が日常生活空間となることは、屋内自身での物の整理が重要となることを意味する。整理の問題は、具体的には、ほとんど収納スペースの確保の問題である。屋内の乱雑さ、また乱雑でなくとも「物」に生活空間を占められることは、屋外に生活の場をもとめることのできぬ冬期間、日常生活をいちじるしく阻害する。

第3に、温暖地とくらべて、持物が多様で、一般に量も大きい。このことは本研究であきらかにするが、とくに生活備品（スキー、ソリ、除雪用具等）やはきもの（長ぐつ、防寒ぐつ、スキーぐつ等）についてちがいがいちじるしい。しかもこれらは、「季節用品」であって、単に置場を一つつくればよいというものではない。衣類などと同様、2段階の収納が必要であり、したがって、2種類の収納スペースが必要なのである。

第4に、日常における物の「たくわえ」の必要が、温暖地におけるよりはるかに大きい。以前は、越冬用の野菜（漬物）を一冬分たくわえる習慣があり、各戸は「むろ」を備えるのがふつうであった。流通機構の近代化が進んで今日では、この慣習もとくに市部ではほとんどみられなくなっているが、生活の安定という点からみると、これは大きな後退である。流通機構などは、災害や経済変動によってかんたんに混乱させられてしまう。食品や燃料などをふだんからたくわえておくことは、温暖地においても生活の安定の重要な条件であるが、とくに積雪寒冷地では重要である。このこともそのためのスペースを必要とする。

1-2 研究のフレーム

この研究は、次の内容からなる。

① 持物の検討

収納にとって、持物の実態を知ることが、基本的なことであり、この研究でも持物について検討する。しかし持物のすべてを知ることが、時間からも費用の点からも無理があるので、寒地でとくに差がでてくると考えられる物、つまり、衣服、はきもの、生活備品についてのみ検討し、かつ、これを温暖地（東京以西の地域）と比較し、持物量の比を知ることが目標におく。

② 収納スペースと収納の実態

収納スペースの種類と規模および収納状態を検討し、問題点を明らかにする。

③ 居住者による評価

現在の収納スペースないし収納状態について、居住者がどう評価しているかを明らかにする。

④ 収納システムの提案

以上の検討にもとづいて、持物の種類と量に見合う収納スペースの形式（種類）、規模、位置について検討する。なお、規模については、持物の量から収納規模を直接に導き出すという方法はとらない。ここでは、収納の実態、居住者の評価・希望、持物、生活様式等についての温暖地との比較を総合して必要規模の目安を得るという方法をとる。

1-3 研究方法

研究方法としては、いくつかの調査データを併用しているが、主要なデータとしたのは、学生に対するアンケート調査である。1,165名の大学・短大の学生にたいして家族の持物について詳細なアンケートを行い、また、住宅のプラン、とくに収納スペース（家具を含む）の種類と規模、収納スペースにたいする主婦の評価についても調査した。回収率は87.7%。なお、この数字は、道内8大学のほか、東京、静岡でも行った調査を含んでいる。またこのほかに札幌市内での独立住宅および集合住宅について行った調査の中の収納に関する部分のデータ（収納スペースの種類、規模、評価に関するもの）および観察記録を使用している。

調査時期は、学生にたいするアンケートは、1977年4月～6月、札幌市内の独立住宅および集合住宅に関する調査は、1975～76年に行ったものである。

2. 持物と収納の実態

2-1 持物の所有実態

持物については、積雪寒冷という地域条件が直接反映すると考えられる持物として、衣料品（防寒衣料、常用衣料、寝具）、防寒靴および冬の生活備品（除雪用具、冬のスポーツ用品、暖房器具とその附属用品等）をとりあげて所有量を調査し、温暖地（関東以西）と寒冷地（北海道）との比較を行った。まず、全体としては、両地域とも当然のことながら、持物量は、高収入層ほど多い。ただし、平均300万円以下および年収400万円以上の層では、地域差が小さくなる傾向がみとめられる。おそらく低収入層では必要量しかもたぬため、また高収入層では趣味的要素がはいるためと考えられる。また、家族数が多くなるほど1人当りの持物量は少くなる。

さて、持物量の地域差を見るために、標準的な家族層をとりあげて検討する。すなわち、夫婦と中学生以上の子供2人の2世代家族のみをとりあげた。この型の家族は、北海道で254世帯1,016人、本州で83世帯332人である。（表-I-1）

表－Ⅰ－１ 調査対象構成人数

		北海道(人)	本 州(人)	計 (人)
父		254	83	337
母		254	83	337
子供	男子	199	77	276
	女子	309	89	398
計		1,016	332	1,348

世帯主の職業は、両地域とも都市ホワイトカラー層が70%を占め、年収は両地域とも300万円から400万円台が多く、両地域ともほぼ同じ階層とみてよい。これは、大学生に依頼した調査であるということから当然ともいえる。なお、住宅の所有形態（持家が北海道79.9%、本州86.9%）、規模（25坪～40坪がもっとも多い）とも両地域ほとんど差がない。

2－1－1 防寒衣料

防寒衣料の所有量は、父母、子供とも全体として本州より北海道の方が多い。（図－Ⅰ－1）

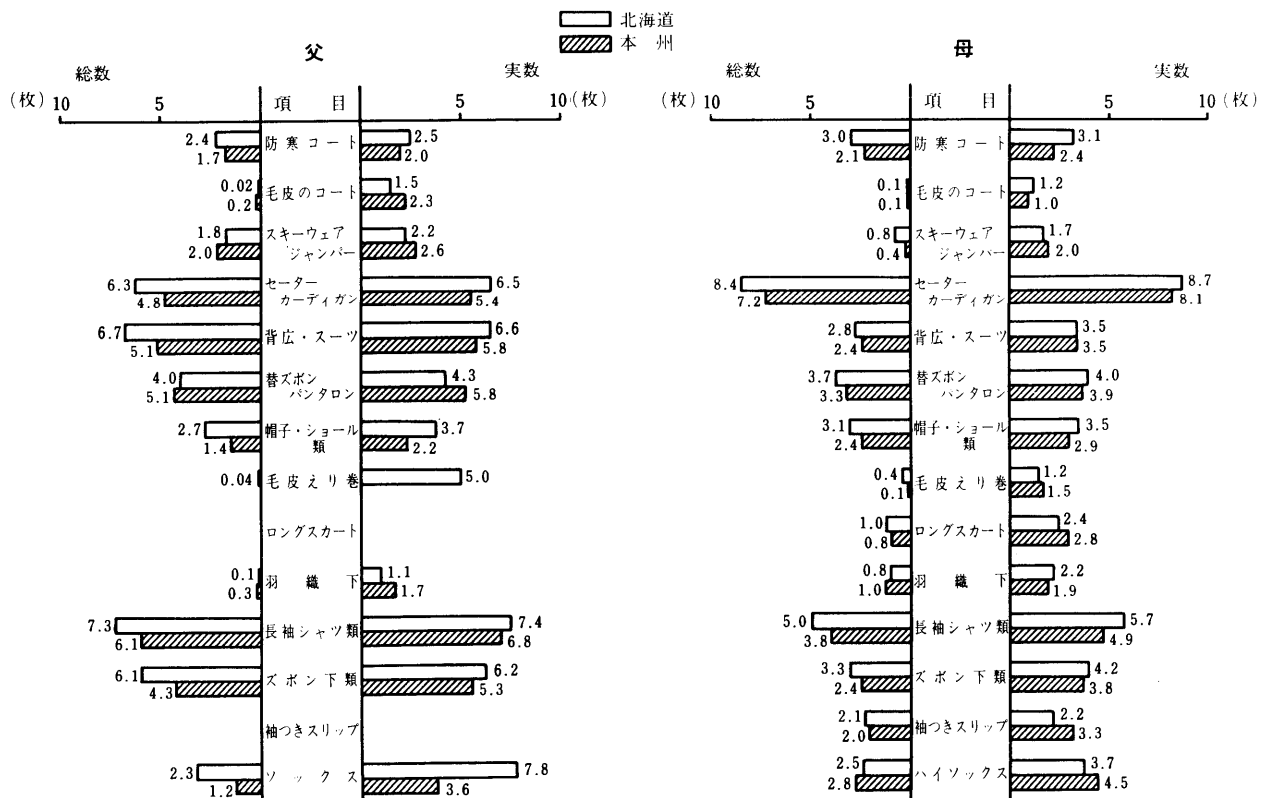
とくに子供では差が大きい。たとえば、防寒コートは、「父」で1.4倍、「子供男子」で1.9倍、またセーターは「父」で1.3倍、「子供男子」で1.7倍の差がみられる。本州の方が多いのは、「父」のジャンパー、替ズボン、「母」のハイソックス、羽織下のみである。「父」

つまり大人の男子で帽子、ショール類の地域差の大きいのが目立っているが（1.9倍）、これは冬、帽子をかぶる習慣があるためであろう。防寒衣料としてあげた項目の1人分の総数で両地域の差を比較すると、「父」「母」とも1.2倍、「子供男子」で1.9倍、「子供女子」で1.5倍の差がある。

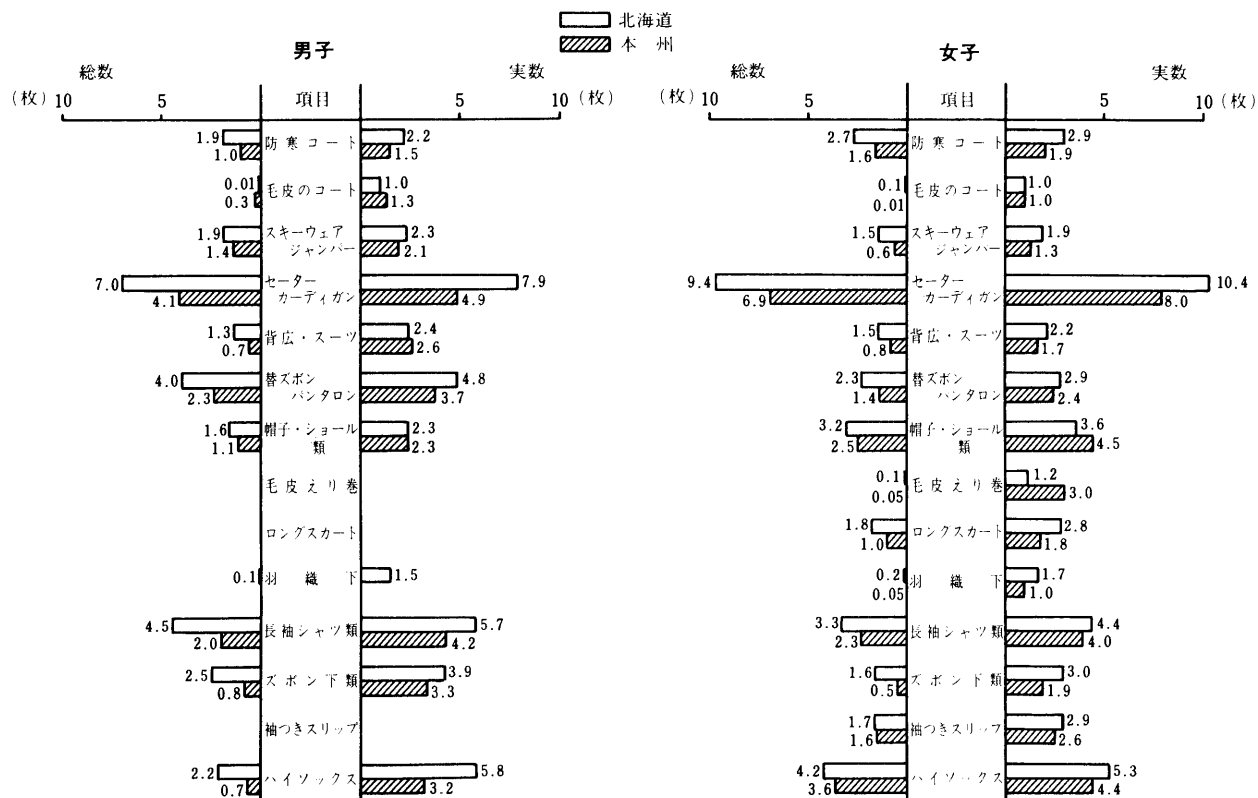
2－1－2 防寒靴

防寒靴（ゴム長をふくむ）は、北国的なはき物であって、当然のことながら、所有率（総数）は、北海道はるかに大きい。（図－Ⅰ－2）とくに、ゴム長以外のいわゆる防寒靴がそうである。しかし、持っている者は、両地域ともほぼ同数（1足強）をもっている。この傾向は「父」、「母」とも同様である。なお、女性の雪ぞうりは、多雪地独特のはき物で温暖地にはみられない。

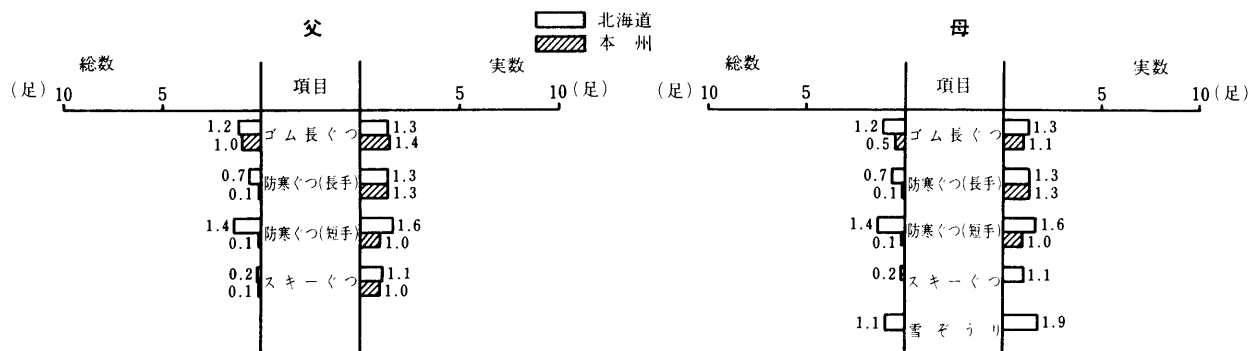
1人当りの防寒靴の総数を比較すると、両地域で「父」で2.7倍、「母」の場合は、北海道では、女性もゴム長が冬は日常的是き物になっているが、温暖地では、女性はあまりはかぬこと、温暖地でスキーぐつ、雪ぞうりを女性もためこむのために6.5倍という地域差がみられている。防寒靴総数は1人当り北海道で「父」3.6足、（本州1.3足）、「母」4.6足（本州0.7足）で、これが普通のはき物以外に加わる。この多様なはき物が、同時に玄関に並べられることが実際には多いので、収納と同時に玄関の広さにも配慮が必要となる。



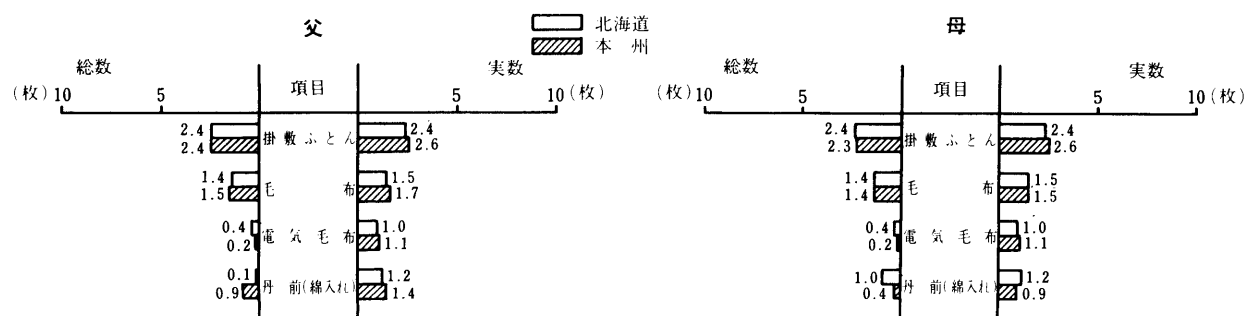
〔註〕総数は全体の平均所有数、実数は持っている人のみの平均所有数。



図－I－1 地域別防寒衣料



図－I－2 地域別防寒靴



図－I－3 地域別寝具

2-1-3 寝 具

寝具の所有量には、地域差はみられない。(図-I-3) ことに、ふとん、毛布類は本州の方が多い気配さえみとめられる。暖房が行きとどいているために、寝具は、かならずしも本州より厚いものを必要としない。これは、生活実感とも一致するデータである。

2-1-4 冬の生活備品

除雪用具、スコップ、ツルハシ、スポーツ用品、雪囲い用具、スノータイヤ、暖房器具等の冬の生活備品は、当然のことながら、北海道では格段に多い。容積換算して比較すると、物によって違いますが北海道では、本州の6~20倍になる。これは、主として物置スペースへの需要となる。

以上の検討から、北海道の家庭での持物を本州(東京以西)とくらべた場合、防寒衣料、はき物、冬の生活備品については、持物量にかなりの地域差のあることがわかる。この増量分は、それぞれ、住戸内、押入、なんどおよびタンス、靴箱をふくむ玄関の収納スペース(クローク等)および玄関の広さ、それに物置規模への配慮を必要とする要素である。

2-2 収納スペースの実態

2-2-1 収納空間の保有状況

① 物置、納戸

押入の他に大きなスペースをとり、保有率の高い収納空間として物置、納戸がある。物置は北海道で95.8%とほとんどの住宅にあり、納戸も35.1%(昭和50年8月、札幌の独立住宅の調査では52%)と比較的多い。これらの数字は関東以西のそれぞれ84.4%、30.5%とくらべて10~5%程度の開きがある(図-I-4、5)。

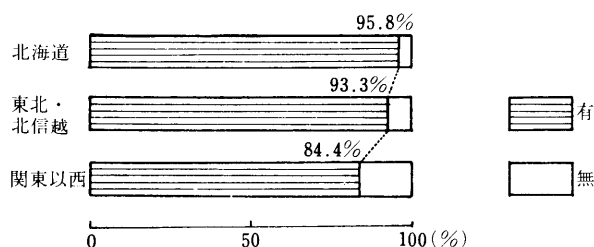


図-I-4 物置の有無

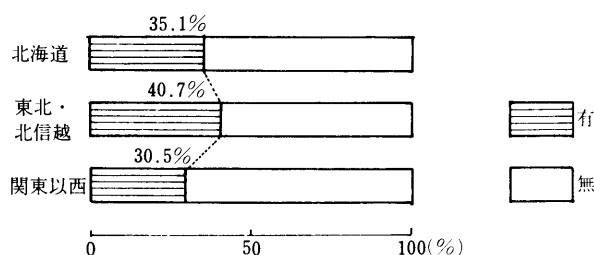


図-I-5 納戸の有無

物置の位置について見ると(図-I-6)、北海道では住宅内に設けたいわゆる「内物置」が多いのが特徴的である。住宅の内と外の両方にもつものと合わせてその割合は半数に近く、積雪寒冷地における収納形式のひとつのあり方が示される。一方、物置、納戸の保有率は住宅

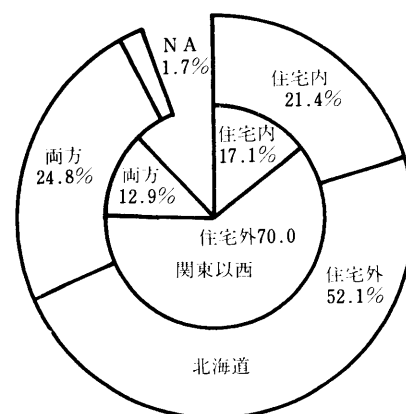


図-I-6 物置の位置

の供給型によって差がある(表-I-2)。特に最近ふえてきている民間の建売分譲住宅で低いのが目立つ。これは宅地の狭小化、合理的な収納を無視した極端な面積効率優先の結果である。

表-I-2 収納場所の有無 (%)

供給型	物 置		納 戸		む ろ	
	ある	ない	ある	ない	ある	ない
注 文 住 宅	93.0	7.0	61.0	39.0	53.2	46.8
民間分譲住宅	79.7	20.3	34.0	66.0	9.9	90.1
公社分譲住宅	92.0	8.0	62.3	37.7	46.8	53.2
全 体	89.9	10.1	52.0	48.0	38.6	61.4

札幌市内の独立住宅調査 昭和50年8月

② むろ、屋根裏利用

むろのある住宅は北海道で圧倒的に多い。関東以西の3.2%に対して47.5%と約半数の住宅がむろを持っている(図-I-7)。また屋根裏を収納空間として利用している住宅も多く、その割合は関東以西の2倍に近い。むろが多いのは、漬物や越冬用野菜などの食料の貯蔵習慣が広く行き渡っているためであるが、さらに床下のみならず小屋裏をも有効に使おうとしている実態から屋内の収納スペースに対する強い要求がうかがえる。

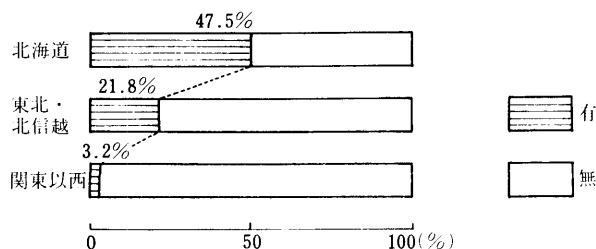


図-I-7 むろの有無

③ 地下室

地下室をもつ住宅は今のところ少なく北海道でも6.1%（関東以西で1.0%）である。しかしこれらの地下室は、物置あるいは食料、燃料の貯蔵等収納スペースとしてよく使われており、積雪寒冷地におけるたくわえの空間として地下室の有効な一側面が示される。地下室の利用については、広い屋内収納スペースの確保という意味があるばかりでなく土地の有効利用にもつながり、今後積極的に利用をはかるべき収納空間のひとつとなろう。

2-2-2 収納空間の規模

① 収納面積比

〈図-1-8~12〉は、北海道と温暖地との収納空間の比重の違いを見るために物置、押入、納戸等各収納スペースの住宅面積に占める割合を示したものである。それによると物置は、16%以上のものを除いて北海道で4~6%、関東以西で2~4%がそれぞれピークとなっている。また押入はともに4~6%、納戸は北海道で2~4%、関東以西で4~6%のものが最も多く、個々のスペースについて見る限り温暖地との間に大きな違いは見られない。しかし、各スペースの保有率の違いがあり、

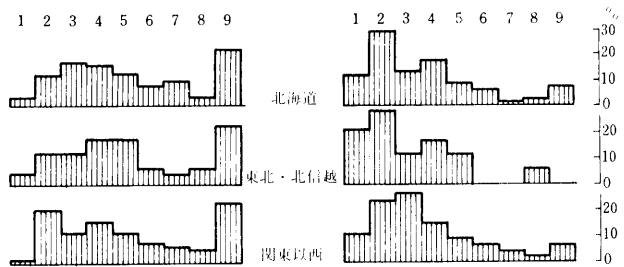


図-1-8 物置の占める割合

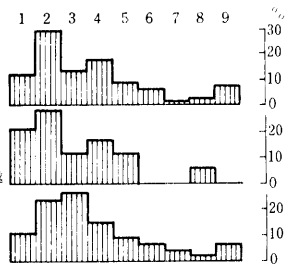


図-1-10 納戸の占める割合

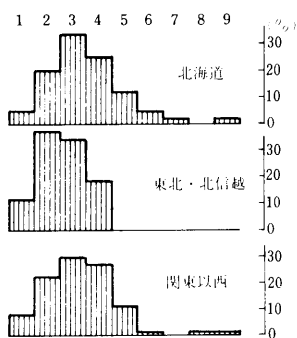


図-1-9 押入の占める割合

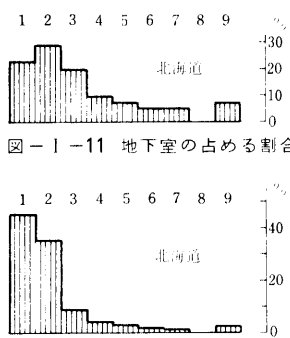


図-1-11 地下室の占める割合

凡例・物置、押入、納戸、むろ

- | | |
|--------|---------|
| 1 2%未満 | 6 10~12 |
| 2 2~4 | 7 12~14 |
| 3 4~6 | 8 14~16 |
| 4 6~8 | 9 16%以上 |
| 5 8~10 | |

凡例・地下室

- | | |
|---------|---------|
| 1 5%未満 | 6 25~30 |
| 2 5~10 | 7 30~35 |
| 3 10~15 | 8 35~40 |
| 4 15~20 | 9 40%以上 |
| 5 20~25 | |

むろ、地下室を含めた全収納空間の割合で見ると北海道の平均で17.8%、関東以西で13.1%と4~5%程度の開きがある。この他屋根裏利用の多いことも考えると北海道における収納空間の比重が相対的に大きいことがうか

がえる。

収納空間の占める割合の経年変化を見ると（図-1-13）、物置が年々減少している一方、押入、納戸の面積比はほとんど一定で変わらない。物置の減少はひとつに宅地の狭小化に対応したものであり、押入、納戸については生活様式などの変化にもかかわらず基本的な住生活の維持のための最低限度の規模を守ってきた結果と考えられる。

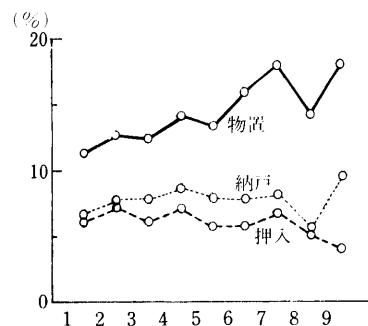


図-1-13 収納空間の占める割合（年代別）

凡例（家屋年数）

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1 5年未満 | 4 15~20 | 7 30~40 |
| 2 5~10 | 5 20~25 | 8 40~50 |
| 3 10~15 | 6 25~30 | 9 50年以上 |

② 押入

〈図-1-14〉は押入の1戸あたりの間口間数をあらわしたものである。それによると平均では両地区とも3間程度であるが、2間以下から6間以上の範囲まで広く分布しており押入の規模があまり一定していないことを示している。間口5間以上のものが20%以上ある反面、2間以下のものも多く北海道で全体の $\frac{1}{4}$ （関東以西で31%）以上あり、一部小規模なアパートが含まれているとはいえ問題が大きい。成人1人あたりの規模では、1.0~1.5㎡の間に集中しており平均もこの範囲にある。

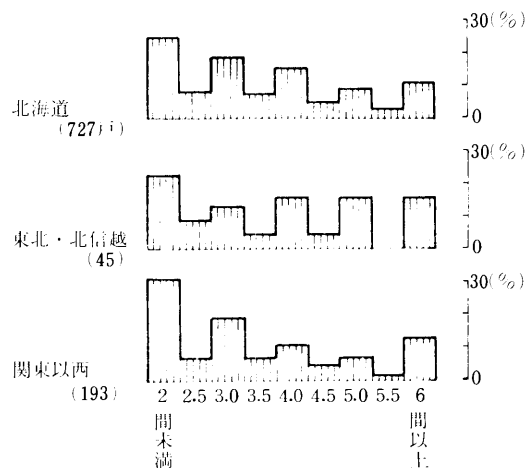
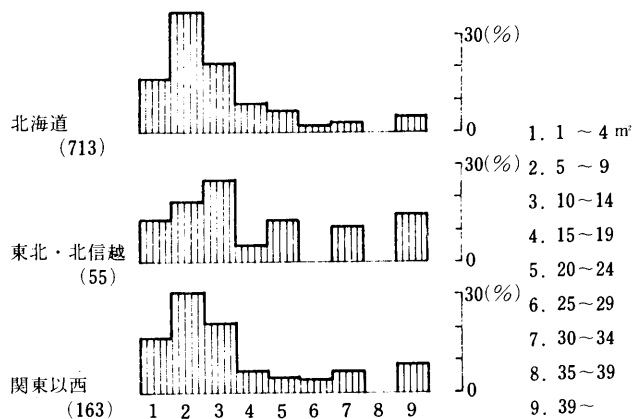


図-1-14 押入の規模

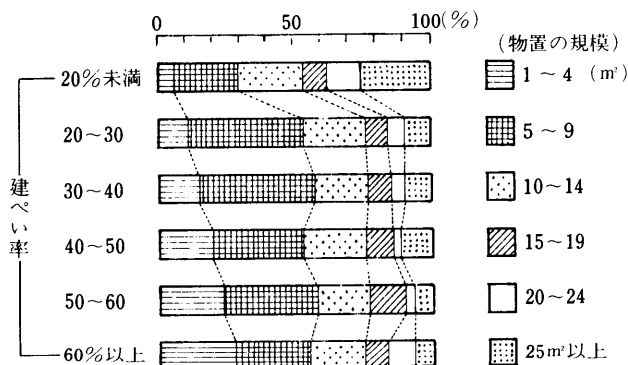
③ 物置，納戸

物置の規模は30㎡以上と極端に広いものもあるが，大半が5～9㎡（北海道で37％）を中心として14㎡以下の範囲に集中している（図－I－15）。



図－I－15 物置の規模

1戸あたりの平均規模は2.5坪程度，1人あたりの規模は約2.0㎡で地下室を除いて最も大きな収納空間となっている。しかし，すでに見たように物置の規模は年々減少しており，特に建ぺい率の増加とともに1坪以下の小さなものがふえている（図－I－16）。



図－I－16 建ぺい率と物置の規模

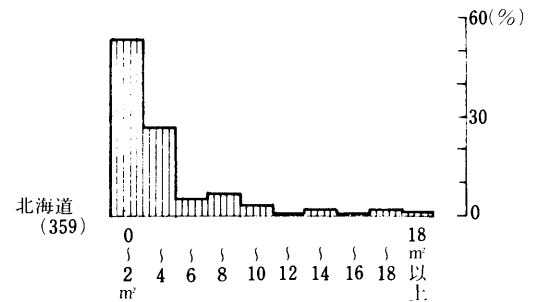
納戸は，住宅内物置の性格をもち物置と押入との中間的な機能を果していると思われるが，規模の点からもちのことろかが見える。すなわち1戸あたり2.0坪，1人あたり1.9㎡が平均的な数字である。

④ むろ，地下室

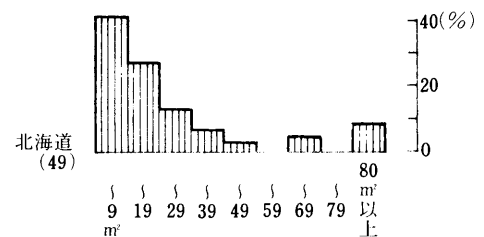
むろは，4㎡以下に81％，地下室は19㎡までの範囲に67％がそれぞれ集中している（図－I－17,18）。平均規模ではむろ0.5坪程度，地下室4.0坪程度となっている。

2-2-3 集合住宅の収納スペース

現在たてられている公営，公団，分譲マンションの集合住宅では，収納スペースとして一般に押入および住戸

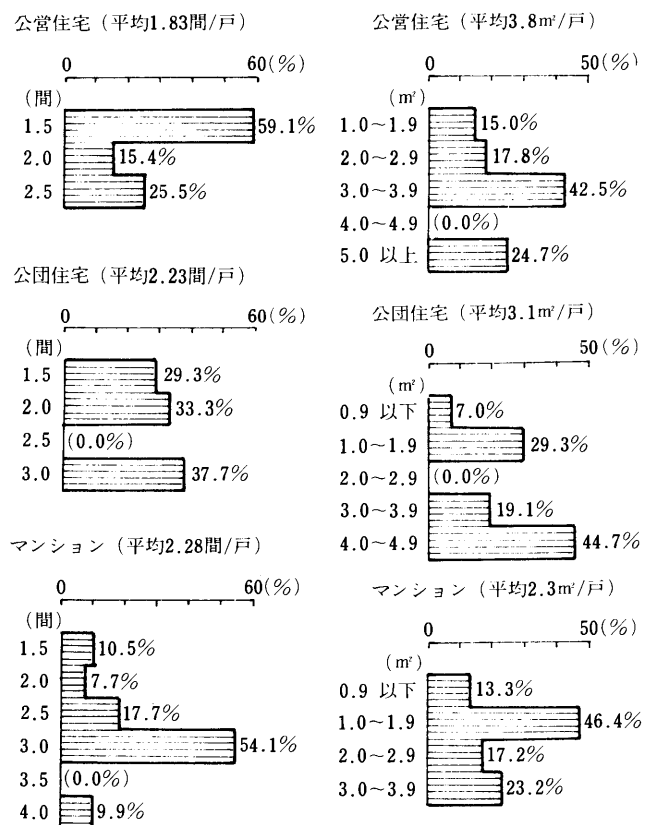


図－I－17 むろの規模



図－I－18 地下室の規模

内あるいは住戸外に物置が用意されている。しかしこれらの規模はきわめて小さい。札幌市における集合住宅調査（昭和51年8月）によると，押入の1戸あたりの平均間口と物置の平均規模は，公営住宅で1.8間と3.8㎡，公団住宅で2.2間と3.1㎡，マンションで2.8間と2.3㎡と一般の独立住宅の平均の半分程度にすぎない（図－I－19,20）。規模の不足は明らかである。



図－I－19

1戸あたりの押入の間口

図－I－20

1戸あたりの物置の規模

当然これらの規模に対する不満は強く、全体の60～70%の人達がスペースの不足を訴えている。現状の収納スペースの広さと居住者の評価との関係から満足の割合が半数を越える値として押入で0.8～1.0間／人、物置で1.6～2.0㎡（0.5坪強）／人という数字が得られており、集合住宅の収納規模についてひとつの目安となろう。一方、スペースの位置の点では屋外物置に対する不満が強い（表－I－3）。「離れているので利用しにくい」「冬、除雪がめんどろ」などがその理由としてあげられており、冬期間の利便性などを考えると物置は住棟の内に併設し、その1階部分か地下室を利用して納めるのが望ましい。実際に地下室に物置のある集合住宅ではこの点での評価が高い。

表－I－3 物置の位置とその評価

物置の位置 評価項目		住戸内+地下		住戸内+屋外	住戸内のみ
		南7西14(市営)	M団地		
広 さ	十分	81.8 %	61.2 %	46.5 %	32.0 %
	不足	18.2 %	38.8 %	53.5 %	68.0 %
使い勝手	満足	70.6 %	40.5 %	48.8 %	37.1 %
	不満	29.4 %	59.5 %	51.2 %	62.9 %

2－3 置き場所と評価

2－3－1 生活備品

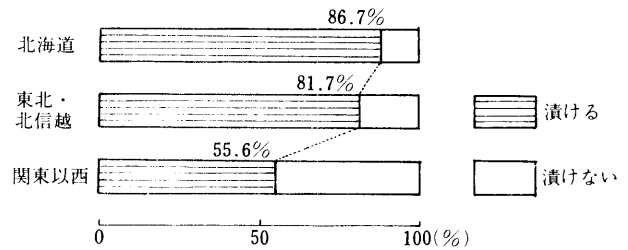
物置には生活備品のほとんどが収納されている（表－I－4）。しかし、物置に収納されるものは、季節によって多少変動する。すなわち、除雪器具、スキー用具、スケート用具、そりなどは季節（冬）になると、物置からほかへ移動するものがある。移動する先は、概ね玄関とみることができる。納戸から玄関へという移動もある。冬の生活備品の主要なもの、もっともひんぱんに使う用具の置き場所として、玄関が重要な役割をはたしていることがわかる。このことは、生活動線から考えてもあきらかであろう。コート類やはきものなどの収納も含めて、玄関の収納機能を重視することが必要である。

季節によって移動するもうひとつの生活備品として、暖房器具がある。これも季節外には物置におかれていることが多いが、冬になると、当然のことながら居間、個室へ移動する。

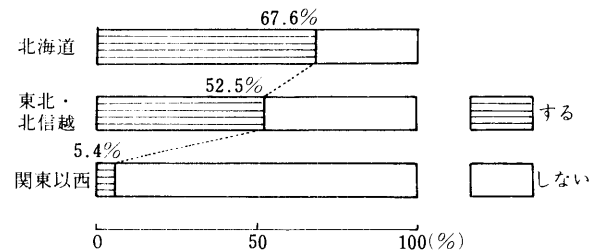
自転車、乳母車、三輪車のような「大物」は、物置がない場合、収納が非常にやっかいである。物置のある家では、季節の内外を問わず概ねそこにおかれるが、物置のない場合、冬の間、玄関におくものが多い。もちろん冬は使えないので、ただ置くだけである。さらに、数はすくないが、納戸、廊下、あるいは外におきっぱなしというしまい方をしているものもある。このあたりは、冬でも庭が物置として使える温暖地と異なる所である。屋内物置と同時に、玄関の収納機能の充実が必要である。

2－3－2 漬物、食料の貯蔵について

漬物や越冬用野菜などの食料の貯蔵習慣のある家は温暖地にくらべて圧倒的に多い。漬物をつける割合は関東以西で55.6%に対して北海道で86.7%、食料の貯蔵は5.4%に対して67.6%である（図－I－21,22）。その量も



図－I－21 漬物について



図－I－22 冬の食料の貯蔵

多い。北海道ではそれぞれ50～100kg程度貯蔵する家が多くこれらのためにかなりのスペースが必要となっている。漬物樽の置き場所は物置がほとんどで、食料の貯蔵はむしろ、ついで物置が多い。これらのスペースについて不満を訴えている場合の理由を見ると、「せまい」のほかに「使い勝手がわるい、取り出しが不便」、「物がくさる」などがあげられている。貯蔵のための適当な温度と使い勝手の点から、地下室を利用した食品庫を設けることは有効であろう。

2－3－3 主なものの置き場所——集合住宅の場合

前述したように収納スペースの不十分な集合住宅では、北海道的生活備品を含めて収納場所に困るものが多い。置き場所に問題のあるもののひとつに暖房用の灯油がある。個別暖房の場合、その燃料はほとんどが灯油で、全体の7割が18ℓカン、3割が200ℓ入りドラムカンで購入している。石油カンやポリタンクは物置の他住棟や住戸の玄関、ドラムカンは屋外の物置ないしは住棟の入口まわりに置かれているが（図－I－23）危険な上に運搬が大変で居住者の不満が強い。また自転車、三輪車等を所有している家が全体で6～7割あるにもかかわらず適当なスペースが用意されていない。このため現状では物置の他階段室や廊下、住棟や住戸の玄関などに置かれており（図－I－24）同様に不満の声が大きい。この他にも特に冬期間収納場所に困るものが多いが、そのものと現状の置き場所を示したのが表－I－5である。

玄関の収納利用が多いほか部分的にしる住戸、住棟のあ

表-1-4 北海道的生活備品の収納場所

a = 道内 b = 道外

	物置	車庫	押入	玄関	納戸	各室	台所	居間	外	心	地下室	廊下	サニタリー	階段下	サンルーム	浴室	ベランダ	下駄箱	隣り場	ストーブの上	サニタリー	縁側	土間	洗面所	その他
1 除雪器	a	●	●	●	●				●		●						●								
	b																								
2 スコップ ツルハン	a	●	●	●	●				●		●						●				●				●
	b	●	●																						
3 スキー用具一式	a	●	●	●	●	●				●	●	●													
	b		●	●																	●				
4 スケート用具一式	a	●	●	●	●	●					●	●						●							●
	b																								
5 雪ざり	a	●	●	●	●					●	●							●							
	b																								
6 スペアタイヤ	a	●	●	●	●	●					●						●								●
	b		●																						
7 石油ストーブ類	a	●	●	●	●	●		●	●		●	●													
	b	●			●	●		●																	●
8 煙突類	a	●	●	●	●	●		●	●		●	●						●							
	b																								
9 石油タンク	a	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●					●								●
	b	●	●	●	●	●																			
10 自転車	a	●	●	●	●	●			●	●	●	●					●								●
	b	●	●	●	●	●											●								
11 漬物桶	a	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●					●								●
	b	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●					●								
12 漬物タンク	a	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●					●								●
	b																								

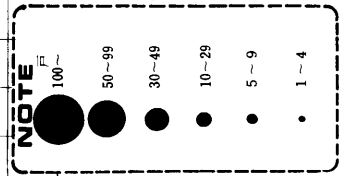


表-1-5 収納場所に困っているものとその置き場所（集合住宅）

	物置	棟の出入口	階段室	車庫	郵便下	玄関	バルコニー	屋外	押入	天袋	部屋のすみ	タンスの上	ソファの下の隙間	居間	台所	洗面所	脱衣所	浴室	浴室出入口	洗濯機の上	P.S.	会社	実家	知りあいの家
1	自転車	●	●	●	●	●	●	●	●		●												●	●
2	スキー	●	●			●	●				●					●								●
3	古新聞	●	●		●	●	●		●		●	●	●	●		●				●	●			
4	掃除用具	●			●	●	●		●		●		●	●		●	●	●						
5	洗濯機	●	●		●	●									●	●			●					
6	三輪車・乳母車	●	●		●	●	●		●						●									
7	食料 (野菜・果物)	●	●	●	●	●	●	●	●		●		●	●	●						●			
8	漬物(樽)	●		●	●	●	●	●																
9	家具	●		●		●	●		●		●												●	●
10	衣類	●				●			●		●	●											●	
11	ゴルフ用具	●				●				●	●								●					
12	車のタイヤ	●				●	●															●		●
13	はき物	●				●			●															
14	ビール・ジュース	●				●	●								●						●			
15	石油カン	●				●	●				●													
16	ゲタ箱	●			●	●										●								
17	布団	●							●		●												●	●

NOTE

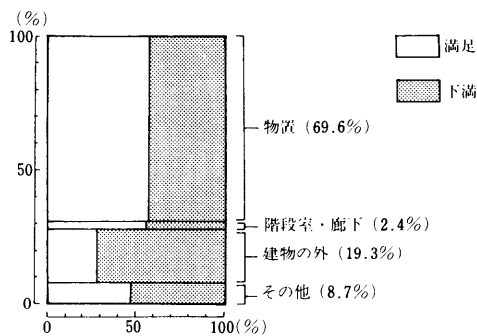
50～

30～49

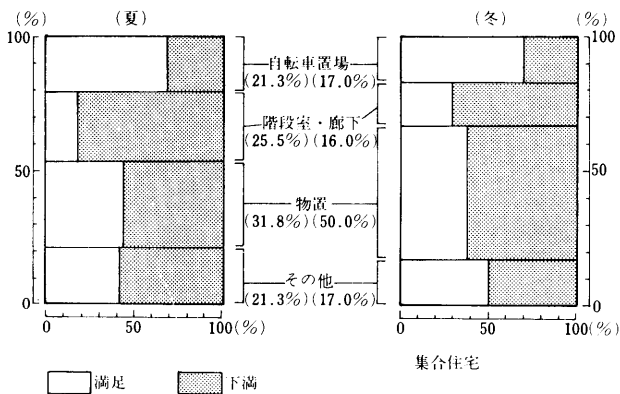
20～29

10～19

1～9



図－I－23 灯油の置き場所とその評価



図－I－24 自転車の置き場所とその評価

らゆる部分が収納スペースとして利用され、ついには他人の家にあずける例までであることがわかる。これを見ても第1に収納規模の拡大が必要であり、さらに屋内の多様な収納システムが必要とされていることが理解できよう。

3. 収納家具の実態

3-1 収納家具の寸法、形式、規模

2-1で北海道における防寒衣料、防寒下着類の増量を明らかにしたが、それは必然的に洋服タンス、整理タンス等置家具の所有数も増加させ、居住空間を狭めることになる。ここでは収納家具、押入について下記の3点について検討を行なった。

1. 置家具、造りつけ家具の収納面積量、容積量の地域差
2. 押入の収納面積量、容積量の地域差
3. 押入幅、奥行、高さ、寸法の把握と押入形式に関する使いやすさ

3-1-1 収納家具の収納面積量、収納容積量の地域差
食器棚、流し台、調理台、ガス台等の占める空間は年収、家族数、床面積に無関係にほぼ一定値を示すが、洋服タンス、整理タンス、押入空間には地域差がみられ、年収301万～399万の階層で床面積100㎡の住宅の場合、道央では関東以西の2倍、道東では4倍の洋服タンスを使用している。また、物品棚、押入れとも住宅面積と比例している。北海道での成人1人当たりの大よその目安は押入一間幅、洋服タンス（900×600×1800）1個、整

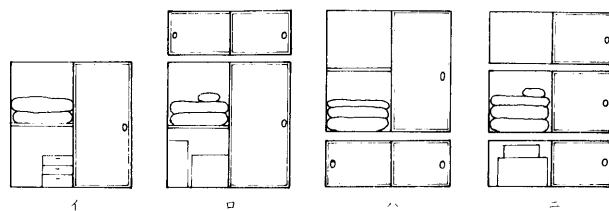
理タンスは（900×600×900）1個であろう。

3-1-2 押入の収納面積量、容積の地域差

前にのべたように、寝具の所有数量には地域差はみられないが、押入空間についても明らかな地域差はみられない。

3-1-3 押入幅、奥行、高さ寸法の把握と押入型式に関する使いやすさ

押入幅では1間幅（1800㎜）、1.5間、奥行900㎜高さ6尺（1800㎜）、8尺（2400㎜）に集中し、中段高さ900㎜一段が多く、二段仕切りの場合は600㎜、1600㎜が使用されている。何れも家具同様使いにくいという評価は極めて少なく、大方が現状の寸法を使いやすいとしている。押入型式については下記の4型式を取りあげ、使用頻度と使いやすさを表-I-6に示す。



表－I－6 押入の型式と使いやすさ

押入型式	年収301万～399万の層				
	サンプル	使いやすい		使いにくい	
イ	130	106	81.5%	24	18.5%
ロ	29	23	75.3	6	26.7
ハ	34	34	100	—	—
ニ	16	16	100	—	—

イ、ロは伝統的な形式で、もっとも多く使われているが、評価は必ずしも高くない。今後、ハ、ニの型式を中心にきめ細かな押入の設計が望まれる。

4. 評価と問題点

4-1 収納空間の現状に対する評価

4-1-1 収納空間の広さ、使い勝手について

〈図-I-25〉は、札幌市内の独立住宅の居住者に住みごちに関する不満をあげてもらったものである（昭和50年8月調査）。それによると収納スペースの不足に対する不満が最も多く、これが住みごちの評価に与える影響の大きいことがうかがえる。収納空間全体の大きさに対しては約半数が、物置、押入、納戸の各スペースについては40～50%の人達がスペースの不足や使い勝手のわるさを訴えている（図-I-26,27）。このことは収納空間の規模はもちろんのこと位置や形式についても十分な配慮が必要なることを示している。関東以西の場合と評価の点でそれほど差はないが、寒冷地の収納空間に

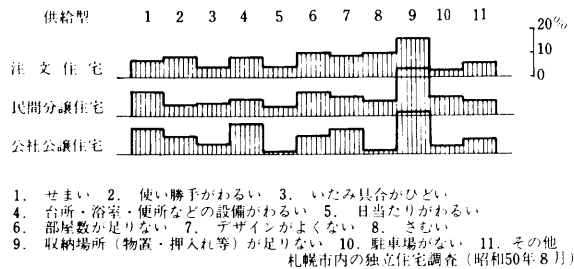


図-I-25 現住宅の不満

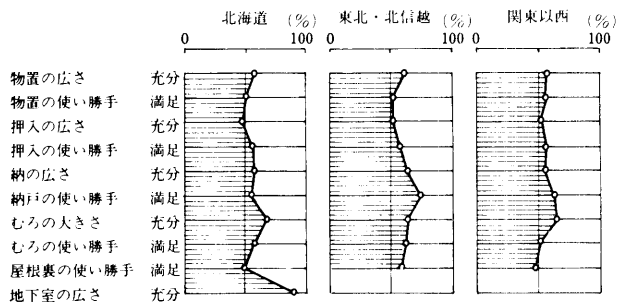


図-I-26 収納スペースに関する評価

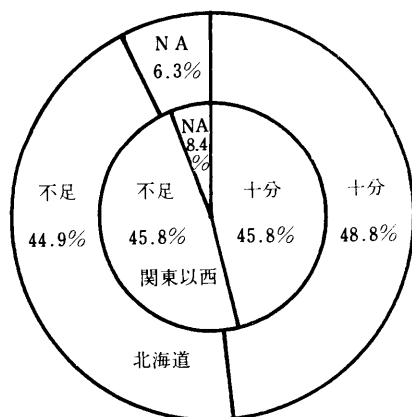


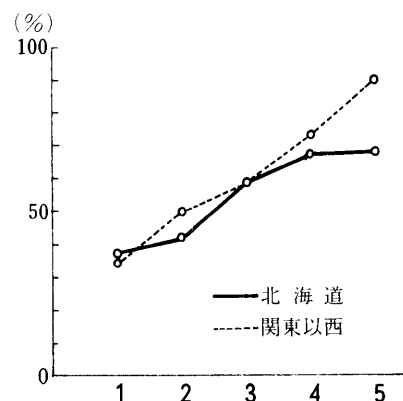
図-I-27 収納スペース全体の評価

問題の多いことにはかわりがない。一方、地下室の広さについて満足の割合がきわめて多いが、これは現状の規模に対してというよりも、とにかくあることに対して評価が高いと言える。

4-1-2 満足度からみた収納スペースの規模

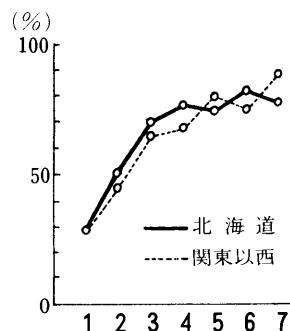
現状の広さと居住者の評価との関係から収納スペースの規模についてひとつの目安を得ることができる。
〈図-I-28~30〉は、押入、物置、納戸の1人あたりの規模と満足の割合を示したものである。それによると押入で1.5~2.0㎡/人、物置で2~3㎡/人、納戸で1.0~1.5㎡/人とそれぞれ現状のピークから1ランクあがったところで満足の割合が半数を越えている。また札幌市内の独立住宅調査(昭和50年8月)でも同様の値として押入1間/人、物置0.5坪/人という数字が得られている。これらのことから押入1.0間/人、物置0.5~0.8坪/人、納戸で0.3坪/人という値が収納スペースの規模の最低限度の目安となろう。なお、集合住宅の

場合については〈2-2-3〉でふれた。



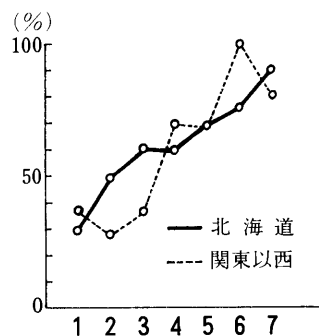
凡例 (成人1人あたりの押入の規模)
1 0.5~1.0㎡ 2 1.0~1.5 3 1.5~2.0 4 2.0~2.5 5 2.5㎡以上

図-I-28 押入の広さの評価 (満足の割合)



凡例 (成人1人あたりの物置の規模)
1 1㎡未満 2 1~2 3 2~3 4 3~4 5 4~5 6 5~8 7 8㎡以上

図-I-29 物置の広さの評価 (満足度)

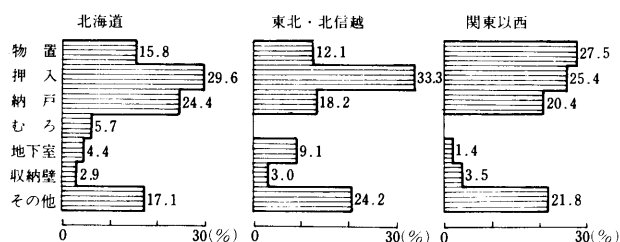


凡例 (成人1人あたりの納戸の規模)
1 0.5㎡未満 2 0.5~1.0 3 1.0~1.5 4 1.5~2.0 5 2.0~2.5 6 2.5~3.5 7 3.5㎡以上

図-I-30 納戸の広さの評価 (満足度)

4-1-3 収納空間の増改築と希望のスペース

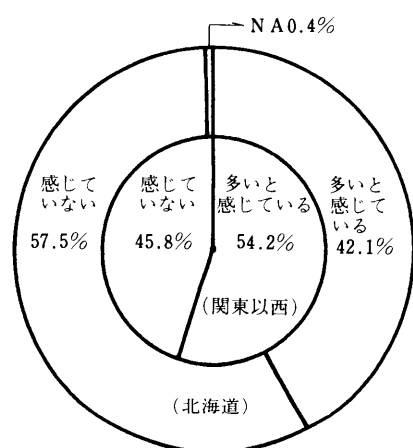
最近5年以内に行なった収納スペースの増改築では、「住宅外に物置をつくった」について「納戸、物入をつくった」、「屋根裏を物置に改造した」が関東以西にくらべて多い。また収納場所として欲しいものとしては押入と納戸が多く(図-I-31)、総じて北海道では住宅内の収納スペースに対する要求が強くあらわれている。



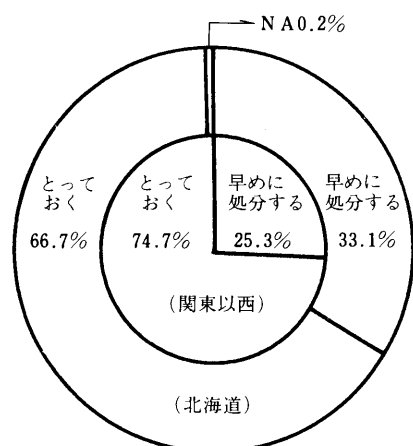
図－I－31 収納場所として一番望まれているもの

4-2 収納に関する居住者の意識

〈図－I－32, 33〉は、家の中に余計なものが多すぎると感じているか否か、およびものを早めに処分、整理するほうか否かを居住者にきいたものである。それによると余計なものが多いと感じている割合が比較的多いにもかかわらず、それらをとっておく家が多く、意識的な側面からではあるが収納スペースの増量要求につながるひとつの要因として注目されよう。またこのことは物の処分、整理ということも収納スペースを考える場合に同時にとらえるべき問題であることを示している。そして特に北海道で入居時あるいは住宅をたてる際に特に収納について考慮しなかったと答えている人が多い（図－I－34）こと、また同じ収納規模にたいして関東以西にく

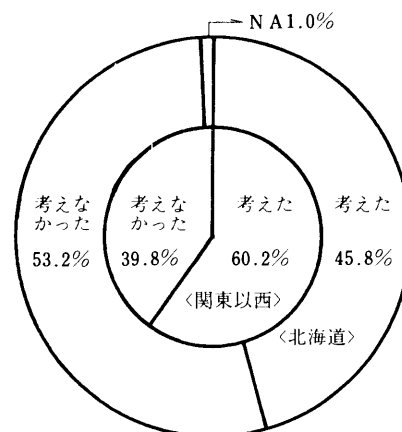


図－I－32 ものの所有量について



図－I－33 物の処分、整理について

らべ必ずしも満足度が低くないことが示すように、収納に対する一般の意識は必ずしも高いとは言えず、住生活のなかでの収納の重要性についてより一層理解を深めることが必要である。



図－I－34 入居時の際の収納についての配慮

5. 収納システム—提言

以上、北海道の住宅の収納スペースについて、持物の種類と量、それを収納すべき収納スペースの現状（規模、位置、形式）、それに対する居住者の評価を検討した。そこから下記のような問題点と課題をひき出すことができる。

すなわち積雪寒冷という気候風土条件から生みだされる独自の生活様式に対応した多様な収納システムを配慮することが必要なのである。

規模の拡大： 持物の種類も量も多いことから第1に大きな収納スペースを必要とする。防寒衣料の2～3割増、防寒靴、生活備品が確実に温暖地に対し増量分として加わる他、たくわえの生活のために貯蔵するものも多い現状のスペースの不足に対する居住者の不満も強く、収納規模は住宅全体の20%、1人あたり4～5㎡程度は必要であろう。

屋内化： そしてそれらのものを冬期間すべて屋内にとり込まなければならない生活条件から、住戸に直結した屋内の収納スペースが必要となる。現状の物置はまだ住宅と分離した形のものが多く、冬期間の除雪、利用の便に問題がある。この点で地下室の有効性は大きい。

位置・形式： 季節用品として2段階収納するもの、すなわち冬と夏とで置き場がかわるものが多いように、北海道の生活用品の特徴的な使われ方、しまい方に対応した収納位置、形式を十分考慮する必要がある。玄関のクロークひとつにしても完備している家はまだまだ少ない。

住宅形式との関連： 玄関の収納利用が多いのが特徴的であり、出入口まわりの形式に配慮を要する。また物置の併設、地下室の活用などこれらのことは住宅形式全

体との関連でとらえていかなければならない問題である。

生活様式への対応： 北海道では温暖地にくらべイス式の生活が多いので、一律に奥行90cmの押入ばかりでなく60cmあるいはそれ以下の物入や戸棚などその生活様式に対応した多様な収納形式が望まれる。なお、収納についての意識は必ずしも高くない。このことは整理整頓の意識の低さに結びつくおそれが大きい。屋内生活の比重が大きいだけに物的なスペースのみでなく、住居内の整理のあり方について、さらに住生活全般について広義の教育活動が必要である。

以下ものと収納位置との対応関係をみたあと、このような条件をふまえながら、個々の収納スペースについての具体的な提案をおこなう。

5-1 もの・と収納スペースとの対応

現状の生活用品としてどのようなものがあり、それらがどのような場所に収納されているかを知るために、ここでは持物を全般的に分類し、それらと収納位置との対応関係をモデル的に検討する。

5-1-1 ものの分類

多様な持物を全てとらえることは不可能であるが、一応生活用品全般にわたって目を通し、用途別、使用者（場所）別、使用時期（季節）別の3つの軸で分類を行った。まず使用者（場所）によってものを4つに大別し、そのなかで用途別に分類した。〈個人専用〉は寝具、衣類、靴類など10種、〈家族共用〉は娯楽用品、暖房用品、除雪用具など12種、〈家事専用〉は調理器具、食料、掃除、洗たく用品など9種、〈客用〉は客用寝具、座ぶとんの2種である。このうち寝具、衣料、靴類あるいは暖房用品、自転車、除雪用具など季節によって2段階収納をするものをさらに分けてある。

5-1-2 もの・と収納スペース

〈表-1-7〉は、前項で分類したものと収納スペースの種類、位置との対応関係をあらわしたものである。この表を見て明らかなように、ニワや軒下など外部空間の収納利用はきわめて限られており、ドラムカンや空ビン、がらくたなどわずかなものを除いてほとんどが屋内のスペースで処理されている。そして季節によって収納場所がかわるものが多いのも特徴的である。寝具、衣料は夏もの、冬ものがあり、季節内のは個室の押入やタンス類、季節外のは一般に納戸や押入にまとめて収納される。スポーツ用品のうちスキー、スケート、そりなどの冬の遊具、スコップやツルハンなどの除雪用具、灯油用のポリタンク類は、夏は物置に冬は玄関や勝手口など出入口に置くことが多い。この他夏と冬とで置き場がかわるものとしては、防寒コート類（納戸、タンスから玄関、廊下）、ストーブ、煙突等の暖房用品（物置から各部屋）、自転車や三輪車、植木鉢類、漬物樽などが

あげられる。またこの表では、玄関あるいは勝手口まわりの収納利用が多いこと、地下室は物置だけでなく、むしろ、納戸の機能をもはたし得ることなどが示される。

このような積雪寒冷地の持物と収納形式の特徴を十分に配慮した収納スペースが必要とされるのである。

5-2 収納スペースの種類、位置、規模

これまでの検討を通じ、考えられるべき収納スペースの種類、位置、規模として以下のようなものが示される。それを図にまとめたのが〈図-1-35〉である。

5-2-1 押入

個室や客室には、寝具、衣料、座ぶとん、箱類などの収納のために基本的に押入を必要とする。その場合、規模は1人あたり間口1間以上、平均的な規模の住宅で間口4間以上は必要であろう。ただし押入の形式については検討の余地がある。天袋をつけるか上部に棚をつけ天井高一杯使えるようにする、中段の高さの調節と場合によっては2、3段利用を可能にする、また洋服ダンス、物入等他への転用性をはかることなどが考えられる。いずれにせよビルトインスペースとしての性格生かし、生活の変化にも対応しうるような押入の形式が望まれる。

5-2-2 物置

自転車、灯油、暖房用品などの置き場として利用度の高い物置は少なくとも1人あたり0.5坪以上、1戸あたり2坪以上は必要である。冬期間の利便性からみて、できれば住宅に併設した「内物置」が望ましく、この場合、玄関や勝手口など出入口付近に設けるか、地下室に設置すると便利である。

5-2-3 納戸

押入と物置の中間的な機能をもつスペースであるが、同時に日常生活でさけがたい家の中の乱雑さを一つに集約してしまいうわば「乱雑さを収納するスペース」としてとくに屋内生活の比重の高い寒冷地では有効である。そこには季節用品や予備用品などやや大型のものが収納できる。規模は1.0～1.5坪／戸程度、位置は個室の近くが考えられる。

5-2-4 むろ（食品庫）

漬物や野菜など越冬用食料のために適当な温度をそなえた貯蔵スペースが必要とされる。現状の台所や勝手口まわりのむろの他に地下室に組みこんだ食品庫が考えられる。規模は0.5～1.0坪／戸程度で十分である。

5-2-5 玄関の収納スペース

玄関が収納スペースとして果たす役割が大きい。温暖地の形式的なものに対し、実質的な機能が強いのである。スペースとしては下駄箱の他に、コート類、雨具のためのクローク（W 600 × D 600）、除雪用具、スキー、ポリタンクなどのための物入（W 900 × D 600）が必要となる。一方、玄関の形式についてはいろいろ考えられる。

表-I-7

物と収納スペース（置き場所）との対応

		居 間			台 所			個 室			客 室			通 路 設備スペース			純収納スペース					
		B (戸棚・物入)	家 具	そ の 他	B (戸棚・物入)	家 具	そ の 他	B (押入・物入)	家 具	そ の 他	B (押入)	家 具	そ の 他	玄 関	廊 下	便 所	ユ ー テ ィ リ テ ィ	納 戸	む ろ (食 品 庫)	物 置	地 下 室	外 部 (ニ ワ・軒 下)
個人専用 Private	寝 具	他季用						○			○							○				
		今季用						○														
	衣 料	他季用						○	○									○				
		今季用		下着類					○													
				背広・スーツ類					○													
				コート・アノラック類					○					○	○							
	靴 類	他季用												○				○				
		今季用												○								
	雨 具													○	○							
	文房具・カバン類								○	○												
	書 籍								○													
	趣味・娯楽用品								○	○												
	鑑賞用品・楽器類								○	○												
家族共用 Family	スポーツ用品	スキー・スケート・ソリ(冬用)											㊦				㊦		㊦	○		
		その他							○	○				○				○		○	○	
	化粧品								○								○					
	図 書(単行本・新聞・雑誌)		○	○	○																	
	娯 楽・鑑賞用品		○	○																		
	化 粧・浴室用品																○					
	医療品		○	○		○	○															
	休息用具(座ぶとん・座イス等)							○			○											
	人 形・節句用品・年中行事用具							○			○							○		○	○	
	大 工・修理道具					○	○										○			○	○	
	家庭用電気器具		○			○			○									○			○	
	暖房用品	ストーブ・煙突類・タンク				㊦			㊦		㊦									㊦	㊦	
		灯油用ドラムカン・ポリタンク												㊦						○	○	○
自転車・三輪車・乳母車																			○	○		
除雪用具(ツルハシ・スコップ等)													㊦						㊦	○		
その他	家庭用雑貨			○		○		○										○			○	
	ガラクタ					○		○										○		○	○	○
	植木鉢・花				㊦																○	㊦
家事専用 Domestic	調理器具					○	○															
	食器類		○	○		○	○															
	食 料	越冬用(漬物・野菜等)																	○	○	○	
		その他(ビン・カンズメ等)			○	○													○		○	
	空ビン・空箱・紙袋類					○		○												○	○	○
	ゴ ミ(袋)							○												○	○	○
	掃除用具(掃除機・バケツ・モップ等)					○								○	○			○				
	洗たく用品(洗たく物・バケツ・粉石けん等)							○		○							○					
	裁縫用品(ミシン・編機・アイロン等)																	○				
育児用品		○	○		○	○		○	○								○					
客 用 Social	客用寝具										○											
	客用座ぶとん										○											

〔㊦：夏 ㊦：冬 ○：地下室〕

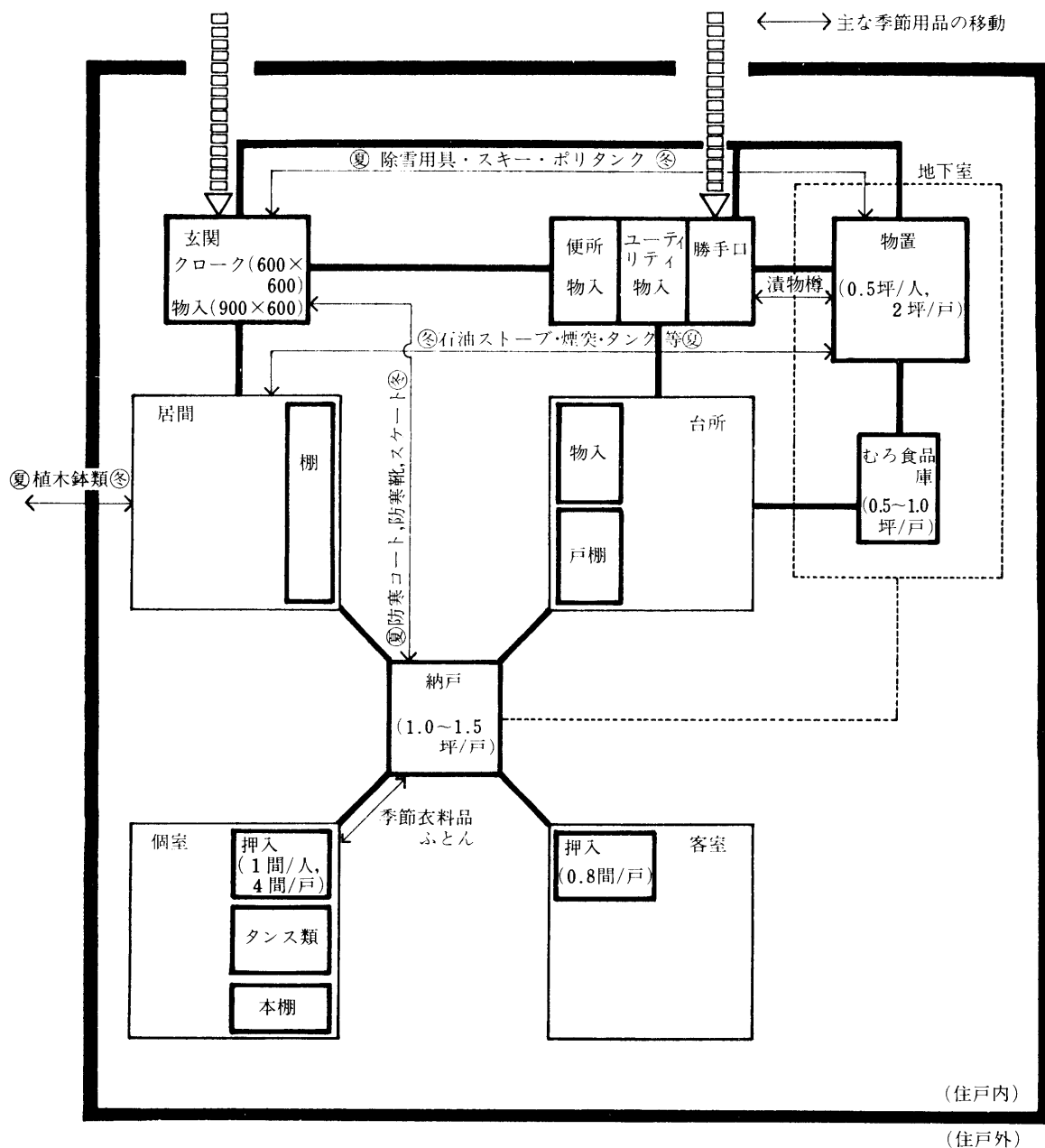


図-I-35 考えられるべき収納スペース

ひとつに土間を広くとったいわゆる通りニワのような玄関にすることがあげられる。収納スペースとしての利用度が高いほか、冬期間も土間上の生活が営める。また、玄関を地下室とつなげることにより冬の生活の利便性は一層高まる。そこにボイラー室があれば、ぬれた衣服や靴、スキーやソリなどのための乾燥収納スペースともつながる。なお、これらのことは勝手口を含めた出入口まわりの形式としてさらに検討を要する。

5-2-6 その他の収納スペース—物入、棚、タンス類

特に地域差はないと考えられるが、その他の各室に用意されるべき収納スペース、家具としては、居間で食器、雑誌、趣味娯楽用品等のための戸棚、台所で食器類、調

理器具用の戸棚と家庭用雑貨等や大型用品のための物入、個室で衣料用のタンス類と本棚、便所ではトイレット用品や専用の掃除用具のための物入、そしてユーティリティで洗たく用品、掃除用具、化粧・浴室用品のための物入、棚がそれぞれあげられる。これらのうちどれぐらいビルトイン化するかはさらに検討を要するが少なくとも機能的に明確な便所、ユーティリティ、台所の収納スペースについては造りつけにすることを考えるべきである。

5-2-7 地下室の利用

積雪寒冷地の住宅にとって、地下室はきわめて有効である。物置、食品庫さらに納戸の機能を含めて屋内の大きな収納スペースを住宅に直結した形で確保できるほか、ボイラー室を置いて乾燥収納スペース、ユーティリティ、

作業スペースとしても利用が可能である。屋内の大きな土間空間は北海道の冬の生活を豊かにするうえで大きな魅力がある。また土地の有効利用、熱環境的な効果の点でも利点があり、規模は明示し得ないが積極的に地下室の利用をはかるべきである。なお、現状で地下室の面積をそのまま住宅の延面積に算入することは、税金や金融公庫の融資の点で問題が多い。これが普及の障害にもなっている。とくに北海道での地下室の有効性を考えて、その普及をはかるためには是非税制上の優遇措置、また延面積に含めないあるいは軽減するなどの行政上の配慮をすべきである。

5-2-8 集合住宅の収納スペース

集合住宅の収納スペースの規模は、一般の住宅の実態にくらべてきわめて小さく、まず規模の拡大をはかる必要がある。その場合には、押入で0.8～1.0間／人、物置で1.6～2.0㎡（0.5坪強）／人程度がひとつの目安となろう。収納スペースの種類および位置としては、住戸内で、押入（フトン、衣類等）、玄関のクローク（コート、靴、スキー、除雪用具等）、住戸外・住棟内で物置（自転車、除雪用具、灯油用ポリタンク等）がそれぞれ必要である。住戸外物置は住棟の1階部分ないしは地下室を使うのがよく、屋外は好ましくない。この他、屋内

物置のひとつとして屋内外の気温を適当に利用した「半冷温庫（漬物、食料）」が考えられる。なお、これは地下物置でかえることができる。また、現在のドラムカンやポリタンクによる灯油の貯蔵は置き場に問題があり、石油ストーブによる暖房の場合にはパイプライン化してメーター制による給油方式を考えるべきである。

5-3 ケーススタディ

ここにあげた3つのプランは、積雪寒冷地の生活様式や住空間の構成原理に見合う北海道的な住宅像を追求していく過程で、そこからでてきた収納その他の様々な計画上の原則や条件を考慮して具体的な形にまとめたものである。3例のうち、独立住宅の2例は実際に道内にたてられたもので、集合住宅の1例は計画事例である。これらの収納スペースについて検討する。

5-3-1 PLAN A（独立住宅－地下室あり）

住宅面積は1，2階合わせて120㎡で、それに60㎡の地下室がついている。個室、客室に押入、棚、物入が奥行900の押入に換算して間口5.4間分、2階に納戸1.5坪、玄関にクローク（900×600）、ユーティリティに物入（450×450）、そして地下室に物置1.5坪と食品庫0.5坪が用意されている。これらを合計した収納規模

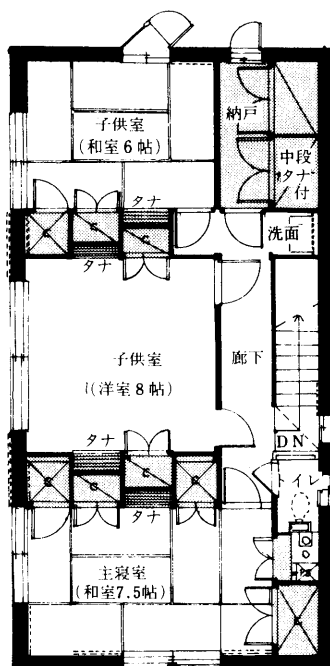
PLAN A

規模 { 1階 60㎡
2階 60㎡
地下室 60㎡

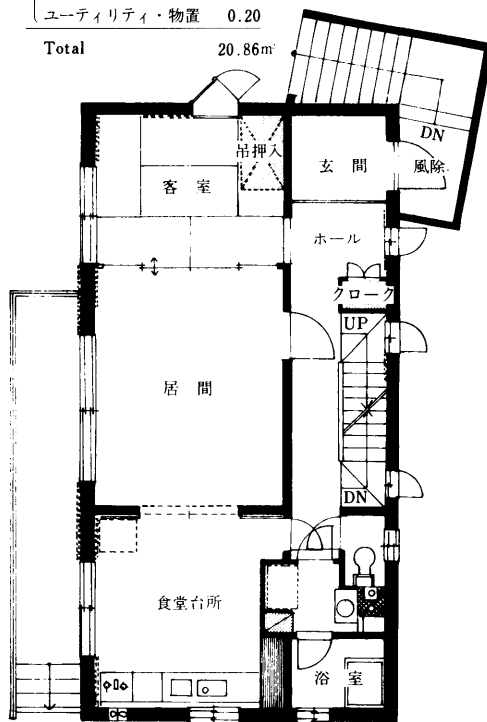
収納スペース

押入(タナ、物入含む)	8.78㎡
物置	4.86
納戸	4.86
食品庫	1.62
玄関クローク	0.54
ユーティリティ・物置	0.20
Total	20.86㎡

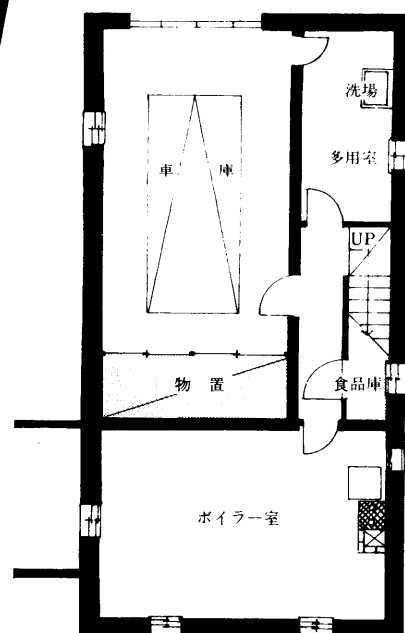
収納面積 20.86/120 → 17.0%



2階 平面図



1階 平面図



地階 平面図

は 20.9 m² で、対住宅面積比（収納面積比）は約17%である。この数字は現状の住宅の平均的な値であるが、この他に地下室の車庫、ボイラー室などが収納スペースとして利用でき規模は十分であろう。

地下室は、勝手口と兼用で出入口付近に除雪用具やスキー、ソリなどが置ける他、多用室で水仕事、またボイラー室ではぬれた衣服、スキー靴等の乾燥、日曜大工や子供の遊びなどができる。なお、この地下室は北海道では住宅に当然付随すべきものと考えて、住宅の延面積には含めない。

5-3-2 PLAN B（独立住宅 - 地下室なし）

老人同居を考えているために住宅面積は165 m²と大きい。地下室のかわりに、玄関とつなげてその横に上部も有効に使った大きな車庫兼物置（5.5坪）を設けている。個室、客室には押入、物入、造り付けのタンスが押入に換算して間口6.2間分、1階には1坪の食品庫がある。収納規模はこれらの合計で31.5 m²、収納面積比は19%である。またこの他に、2階の小屋裏（3坪）が納戸として利用できるようになっており、同居家族としても収納量は十分であろう。

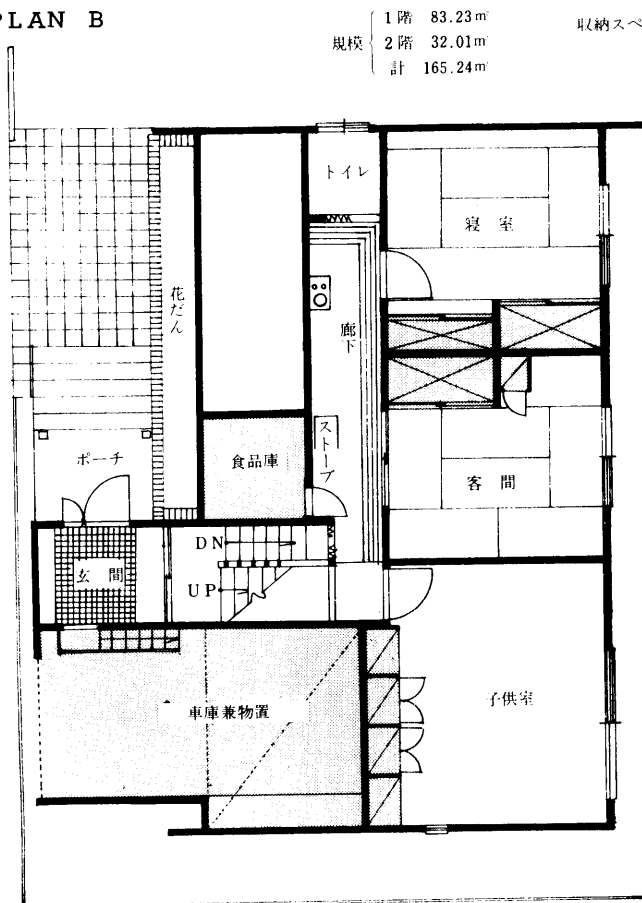
5-3-3 PLAN C（集合住宅 - 階段室型）

従来の中層の公共住宅として典型的な階段室タイプに

いくつかの改良を加えた例である。3 LDK 型で住戸面積は77.3 m²（バルコニー半分を含む）。ひとり1間以上の押入（間口4.3間）、大きめの玄関クローク（0.6坪）、DKに食品用の半冷温庫（900×600）、この他に地下室の利用を考えた住戸外物置（2坪）がある。

これらの合計は15.9 m²、収納面積比は21%である。なお、1階の階段室入口は約4坪のホールで、ここに除雪用具や自転車、乳母車などがおけ共用玄関として有効に使える。

PLAN B

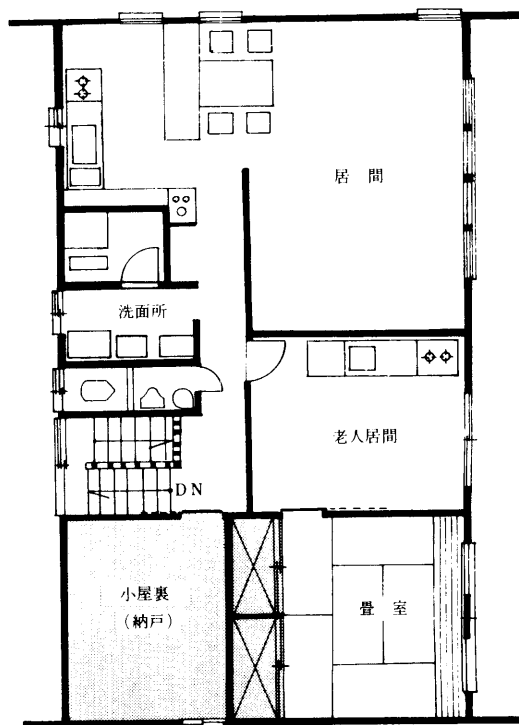


規模	1階	83.23m
	2階	32.01m
	計	165.24m

収納スペース

押入(物入、造りつけ タンスを含む)	10.11m
車庫兼物置	18.15
食品庫	3.3
Total	31.56m

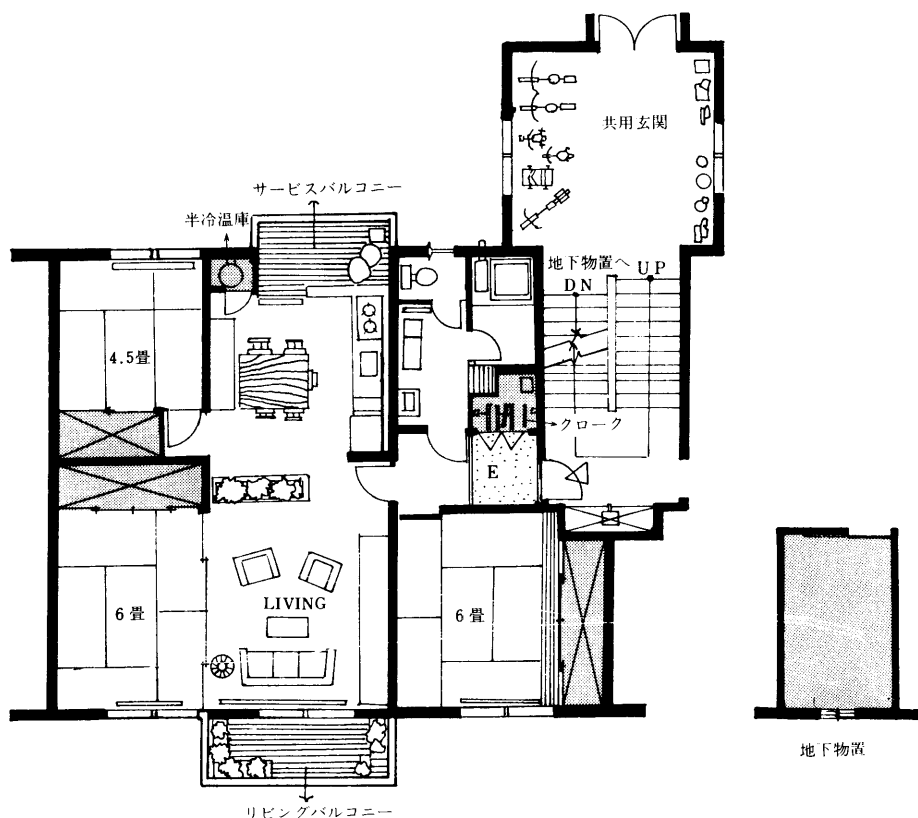
収納面積比
31.56/165.24→19.0%



PLAN C

規模	室内	73.13㎡
	バルコニー(×½)	4.14㎡
	計	77.27㎡
収納スペース		
	押入	6.89㎡
	玄関クローク	1.82
	半冷温庫	0.54
	地下物置	6.60
	Total	15.85㎡

収納面積比
15.85/77.27→21.0%



Ⅱ 老人同居のあり方

1. 目的と方法

我国の高令者の8割程度は、何らかの形で肉親と同居している。この割合は、既に高令化社会に突入している先進諸国と比較する時、極めて高い。しかし、高い同居率が、そのまま快適な老後を約束していることにはならない。一般に高令化に伴い自殺率が高まるが、日本の場合、その傾向は、諸外国よりも遙に高い。それは、何を意味しているのか。とくに、北海道は、寒冷積雪という自然条件の下で、半年間は屋内を中心とする生活を余儀なくされる。加齢に従って、室内で過ごす時間の増大する高令者が、同じ屋根の下で、若い世代と楽しく充実した日々を過ごすためには、居住空間について、肉体的・精神的な変化に対応した様々な配慮が必要となろう。

本章は、以上の観点から、65才以上の高令者とその同居家族を対象として調査を実施し、寒冷積雪地の老人同居に関する計画上の指針を得ようとした結果の分析と考察である。

調査時期は、昭和51年7月上旬、調査用紙配布先は北大、道工大、釧路高専の各建築工学科及び藤女子短大家政科の学生の家庭約250世帯を対象とし、9月上旬回収した。回収率は約76%であった。図-Ⅱ-1、表-Ⅱ-1参照

対象校	回収部数 (枚)	回収率 (%)	有効部数 (枚)	有効率 (%)
北海道大学	27	67.5	24	88.9
北海道工業大学	47	78.3	42	89.4
釧路高等専門学校	14	70.0	12	85.7
藤女子短期大学	160	89.5	152	95.0
計	248	76.3	230	92.7

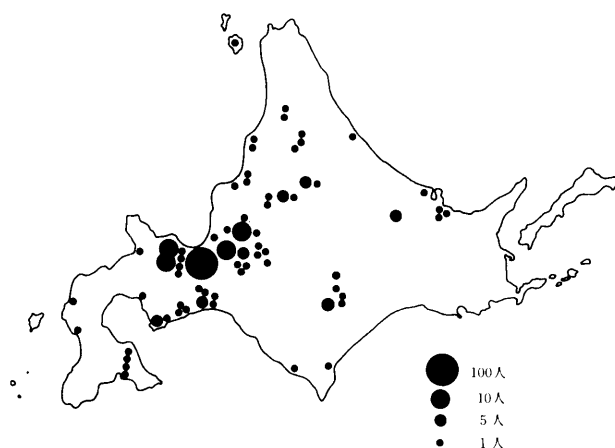


図-Ⅱ-1 調査表配布分布図

表Ⅱ-1 調査対象の内訳

年齢階級 (才)	性別	地 区 別		計	総 計 (人)
		札 幌	その他の地区		
65 ～ 69	男	5	3	8	48
	女	18	22	40	
70 ～ 74	男	4	14	18	75
	女	26	31	57	
75 ～ 79	男	8	12	20	63
	女	19	24	43	
80 ～ 84	男	3	6	9	25
	女	7	9	16	
85 ～ 89	男	4	3	7	16
	女	3	6	9	
90 以上	男	0	0	0	2
	女	0	2	2	
不 明	男女	1	0	1	1
計	—	98	132	230	230
男		24	38	62	
女		73	94	167	
不 明		1	0	1	

年齢平均 74.58 才（男平均 78.81 才 女平均 69.54 才）
夫婦 49 組（札幌地区 21 組，その他の地区 28 組）

2. 同居の理由・家族構成・職業

息子夫婦との同居が 76.4% で圧倒的であり，娘夫婦とは 21% である。同居のきっかけは，子供が結婚したため 5 割であり，子供の成長に伴う必然的結果としての同居が第 1 位。次いで加齢に従い同居を希望したり，配偶者が死亡したり定年退職の理由で約 3 割が同居している。

若い世代と同居してからの年数は，札幌地区では 5 ～ 10 年（約 24%），その他の地区では 20 ～ 25 年（29%）が最も多い。

家族構成は，老人 1 人と若夫婦＋子供の型が，約 6 割を占めている。次いで，老夫婦＋若夫婦＋子供が札幌（22.5%），その他（25.7%）となっている。世帯主の職業は，専門的・技術的・事務的職業と管理職が約 65% を占め，いわゆるサラリーマンが多い。

老人の収入は，年金・恩給が最も多く約 50%，仕送りや小づかいが 24% であり，7 割近くの人が現在の収入に満足していることになる。2 万円以下の月収の人は約 3 割を占めている。

3. 健康状態

健康状態の指標として，外出状況，住居内の階段の昇降や歩行，寝具のあげおろし，腕の動き，視力，聴力，入浴などの 8 項目について調査した。その結果を表Ⅱ-2 に示す。

4. 老人室（専用・共用）の広さ・位置・様式

専用または共用，いずれかの形式で老人室を所有している割合は，全体で 97% である。専用室の場合，札幌地区約 88%，その他の地区約 79% となっている。広さは，6 畳が最も多く，札幌地区では 36.3% を占める。次いで 8 畳間 24.8% となっている。この傾向は，その他の地区でも同じである。その位置は，1 階が最も多く，83% である。1 階に室のある場合，ほとんどが満足している。2 階の場合は，満足度が 36%，不満が 30%，どちらでもないが 44% となっている。位置について満足度の高い 1 階に較べて，2 階の場合には，明らかに不満とする 3 割，さらに満・不満を明確にしない 4 割を加えると 7 割が何らかの意味で満足していない点が注目される。

様式は，座式が圧倒的に多く，両地区ともに 85% であり，併用（座式と椅子式）が 15% である。座式であることに満足している人が 90% もあり，近年洋風化が進んでいる住宅建築のなかでも，従来の様式を好む老人が多いことが知られる。

5. 老人室の暖房と寝具暖房

暖房のあるものは，札幌地区 75.5%，その他の地区 65.9% である。専用室のみにしてみると，札幌 65%，その他の地区 62.5% となっている。表Ⅱ-3 参照。専用室でありながらも，4 割近くが暖房していないということは，極端な場合，冬は冷え切ったねぐらにしかなり得ないという意味で問題であろう。その上，寒い室では結露が発生する可能性も高く，じめじめした空間になり勝ちである。

暖房の種類は，専用室で札幌地区の場合，煙突なし石油ストーブが 31.6% で最も多く，次に煙突付の石油ストーブ 23.3% となっている。その他の地区も類似した傾向である。この種の暖房器具は，室の使用範囲を狭め，特に煙突なしの石油ストーブが両地区で 2 ～ 3 割も使用されていることは，加齢と共に動作の円滑さを失う老人の居住空間における火災の危険性，あるいは灯油の燃焼に伴って発生する水蒸気による結露，排気による空気汚染，不完全燃焼による一酸化炭素の発生など生命の危険性を増大する意味で問題が多い。

老人の寒さに対する反応は，若年者と異なる。温度変化に対する反応も遅く，正常に体温を維持するための反応も弱く，時間も長く必要といわれる。特に寒冷積雪地では，寒さや冷えによる疾患が増すことから室内暖房と寝具暖房を併用している場合が多い。両地区とも約 85% の人が寝具暖房を使用している。器具の種類は，札幌地区で電気毛布が 49.5% で最も多く，次に電気シーツ 12.9%，その他の地区では，電気毛布 67.6%，電気シーツ 12% となっている。

表-Ⅱ-2

調 査 対 象 老 人 の 健 康 状 態

項 目	男 (人) (%)	女 (人) (%)	計 (人) (%)		項 目	男 (人) (%)	女 (人) (%)	計 (人) (%)	
外出 について	どこにでもひとりで でかける	38 67.9	74 52.5	112 56.9	腕 の 動 き に つ い て	高いところや身体 のうしろに楽にとどく	43 67.2	107 64.5	150 65.2
	近い所ならひとりで ゆかれる	11 19.6	43 30.5	54 27.4		片腕は楽に動く	11 17.2	40 24.1	51 22.2
	付添いがないと外出 できない	6 10.7	22 15.6	28 14.2		両腕とも動かしにくい	8 12.5	16 6.6	24 10.4
	回答なし	1 1.8	2 1.4	3 1.5		回答なし	2 3.1	3 1.8	5 2.2
	計	56 100	141 100	197 100		計	64 100	166 100	230 100
住居内 の階段 の昇降 について	楽にできる	34 66.7	71 56.8	105 59.6	視 力	新聞・雑誌を読むこと ができる	60 93.7	142 85.6	202 87.8
	困難である	14 27.4	46 36.8	60 34.1		眼鏡をかけても読むこ とができない	3 4.7	20 12.0	23 10
	ひとりで昇降できない	3 5.9	8 6.4	11 6.3		回答なし	1 1.6	4 2.4	5 2.2
	回答なし	0	0	0		計	64 100	166 100	230 100
	計	51 100	125 100	176 100		計	64 100	166 100	230 100
住居内 の歩行 について	楽にできる	45 80.4	110 78.1	155 78.7	聴 力	不自由がない	51 79.7	154 92.8	205 89.1
	つまづきやすい	8 14.2	24 17.0	32 16.2		補聴器使用	12 18.7	7 4.2	19 8.3
	ころびやすい	1 1.8	5 3.5	6 3.1		殆ど聞えない	1 1.6	3 1.8	4 1.7
	回答なし	2 3.6	2 1.4	4 2.0		回答なし	0 0	2 1.2	2 0.9
	計	56 100	141 100	197 100		計	64 100	166 100	230 100
寝具 (ふとん類) のあげ おろし について	楽にできる	39 70.9	58 41.7	97 5.0	入 浴	ひとりでできる	55 85.9	152 91.6	207 90.0
	低いところならできる	5 9.1	61 43.9	66 34.0		家族の助けをかりてで きる	5 7.8	10 6.0	15 6.5
	できない	11 20.0	20 14.4	31 16.0		そ の 他	3 4.7	2 1.2	5 2.2
	回答なし	0	0	0		回答なし	1 1.6	2 1.2	3 1.3
	計	55 100	139 100	197 100		計	64 100	166 100	230 100

6. 老人室の設備と機能

図-Ⅱ-2は、老人室の近くにあって欲しい機能と同居家族が配慮工夫している項目との関係を示す。

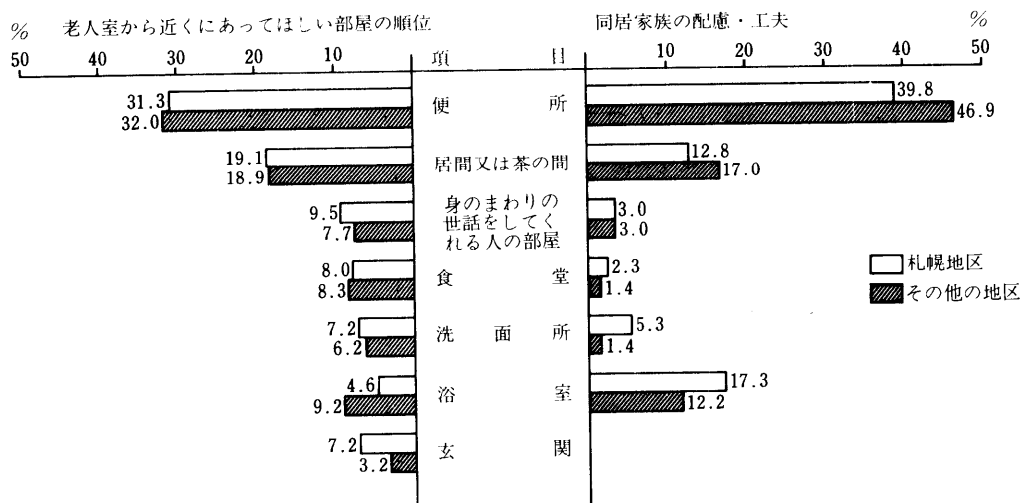
近くに欲しいものの第1位は、便所である。第2位は居間又は茶の間、第3位は身の廻りの世話をしてくれる人の部屋と食堂である。第1位の便所については、生理現象の老化が第1に頻尿にあられることから当然の結果と思われる。居間または茶の間が第2位に挙げられて

いることは、家族との接触を強く希望していることのあらわれであろう。これらの点について、同居家族の配慮・工夫をみると、便所については、全体の51%が何らかの形で行なっている。その中で最も多いのは、専用室の近くに設けた31%、洋式にした29%、その他は暖房器具をとりつけたり、老人専用にしたり、手すりをつけたり、ポータブルトイレを準備するなど、様々な改善がなされている。

表－Ⅱ－３

冬 の 暖 房

項 目		老 人 室 暖 房				老 人 室 の 暖 房 の 種 類												
		有	無	回答なし	計	蒸 気	温 風	温 水	石油 ストーブ 煙突なし	石油 ストーブ 煙突あり	石炭 ストーブ	薪 ストーブ	電気 ストーブ	パネル ヒーター	蓄熱 暖房	ガス ストーブ	こ た つ	そ の 他
		(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)	(人) (%)
札幌 地区	専用室	62	22	1	85	0	8	7	24	20	1	0	6	0	1	3	3	2
		65.0	22.4	11.8	100		10.5	9.2	31.6	26.3	1.3		7.9		1.3	4.0	4.0	2.6
	共用室	12	1	0	13	0	0	1	2	5	1	0	3	0	0	1	1	6
		92.3	7.7		100			5.0	14.2	35.7	5.0		21.4			5.0	5.0	30.0
その他の 地区	専用室	87	45	0	132	0	8	5	20	35	4	2	2	2	0	0	7	1
		62.5	34.1		100		9.2	5.7	20.9	40.2	4.6	3.4	3.4	3.4			8.0	1.2
	共用室	17	6	0	23	0	2	0	4	6	1	0	1	1	0	0	2	0
		73.9	26.1		100		11.8		23.5	35.2	5.9		5.9	5.9			11.8	



図－Ⅱ－２ 老人室の近くに欲しい機能と同居家族の配慮・工夫

居間、茶の間については、家族だんらん室を老人専用室の近くに設けたり、老人用テレビを用意したり、ゆったりと下に座れるようにしたり、広くしたり、暖かくして老人専用の椅子や場所を決めたり様々な試みをしている。

浴室を近くに欲しいとする要望は第４位であるが、浴室について何らかの改善を行ったものは、全体の13%である。その中でも浴槽のふちを低くした場合が４割で最も多く、次いで専用室の近くに設けたり、暖かくして床に滑らない工夫をしたり、ブザーをつけたり、大きな浴槽にして手すりをつけたり、多くの配慮がなされていることがわかる。

7. 計画上の諸問題

今回の調査対象となった高令者は、比較的健康に恵ま

れ、息子あるいは娘夫婦や孫達に囲まれて、平均2万円程度の月収があり、多くは自分の持家に住み、持病はあるが、日常生活にさしつかえなく、身体機能に不自由の少ない人達である。

住生活においては、日当りの良い専用室で、冬の室内暖房、寝具など配慮されているものが多い。しかし、広さについては不満がある。実状は、収納家具が専用室に置かれ、暖房器具がさらに室内を狭くする。専用室の平均は6畳間程度であるが、実際の有効面積は、4.5畳位であろう。

老人夫婦の場合は、2室を持っている割合が多いが、1人の場合にも空間を使い分けることの可能な広さが確保されることが望まれる。一部の老人ではあるが、家族と共用で老人室を使用している場合、不満が多かった。従って、老人と同居家族のプライバシーを尊重する立場

からも、専用室が確立されることが望ましい。

その規模は、冬の暖房や収納家具などを併せ考えると、1人の場合でも8畳間程度の広さが必要であろう。

暖房は、昼も夜も連続して安定した適温保持の可能な方式が望ましい。特に、煙突なしの石油ストーブなどは、加齢と共に危険性が高まるので避けるべきである。

暖房のない専用室は、多目的な利用が少く、冬は冷え切った湿度の高いぬぐらにしか利用されない可能性が強まる。専用室を楽しい空間として、有効に活用するためにも、安定した危険性のない連続暖房は、不可欠であろう。

専用室を2階にもっている例は、全体の約13%、この中で自分から進んで2階に専用室を決めている人達もある。当然のことながら、その人達は、階段の昇降、ふとんのあげおろし、腕の動きなど、機能上の障害が少い。このことは、階段の昇降が、身体の高齢防止に役立っているのではないかと、とも考えられる。これらの人達は、同時に積極的に家庭内の役割を持ち、多趣味で意欲的に生活していることも認められた。

便所の問題は、深刻である。それは、専用室に近いところであって欲しい項目の第1位であったことからわかるが、寒冷期には、その位置・設備や使用の利便性などは、保健上重要な問題である。

特に、札幌地区に較べて、居住年数の長いその他の地区で、旧式便所に悩んでいる人が多いと考えられる。近くにあって、暖かく、気兼ねなく楽に使用できる専用便所が望まれる。

同時に、家族のだんらの空間を積極的に近接させる計画も大切であり、肉親とのコミュニケーションを図る配慮も必要である。その意味においては、専用室は1階が望ましい。

また、庭などへの出入りも自由に、盆栽や土いじりも容易で老人固有の客人も家族に気兼ねなく、出入り可能なアプローチなどを併せ考える時、老人室はできれば1階に設けたいものである。

以上の他に、階段、浴室、便所廻りなど、加齢に合わせた、きめの細かい対応が重要である。一般に、老人同居について何らかの配慮・工夫をしている家庭は、1つの項目だけにとどまらず、いくつもの点について、行っていることがわかる。それは、同居年数の長い家庭に多く、経済の積み重ねの中で、息子・娘夫婦に関係なく、家族全員が要求を察知し、細やかな配慮をしている。

例えば、居間における老人の座る位置を決めたり、老人を中心に話題を進めるなどである。従って、できるだけ早い機会に同居することが、相互理解、相互扶助などの良い人間関係を生み出す可能性があるのではないかと考える。

食生活については、家族と三食をともにしていること

が、健康で円満に過していることに関連のあることがわかった。つまり、家族が献立・調理に配慮、工夫し、早くから若い世代の食生活に順応して行くことが要因と考えられる。

また、食事を共にすることは、その場が家族との接点ともなり、団らん、社交、憩いの場として、よいコミュニケーションを作り出す機能を果たすことにもなる。これらは、多分に経験から生み出された生活の知恵のようなものかも知れないが、いづれにしても、老若両世代の相互の努力の積み重ねの上に、はじめて円満な充実した日々が築き上げられるものであろう。